

## 英語のジェンダーとコミュニケーション

神崎高明

(関西学院大学名誉教授)

近年 LGBT (セクシャルマイノリティ) との関係で、我が国においても、ジェンダー (gender) がしばしば話題になることがあるが、本発表では、英語のジェンダーを主に文法的上の性差の観点から考察する。

英語には無生物の擬人化 (personification) という用法がある。国家、船や飛行機、機械、自然などを愛着を込めて呼ぶ場合に、it ではなく、she を使うことも無生物の擬人化と言える。次の例は擬人化の例で、Nature を she で受けている。

(1) Nature has come through again--she always does. (WDEU: 845)

このように、受ける代名詞によって話し手の気持ちがわかる。「愛情を込めて取り扱う」ものの場合 she を使用するが、もし機械などが原始的な知能 (rudimentary intelligence) をもつ場合には男性形の he で受ける、と Bolinger (1980: 97) は言う。Quirk et al. (1985: 341) でもコンピュータは he、車は she で受けると言っている。

一般に現代英語では、3 人称単数の人を表す通性代名詞は存在しないと言われている。その代わり長い間使用されてきたのが、3 人称単数の男性形である he, his, him であった。これらの代名詞は通性代名詞の役割を果たしてきた。

不定代名詞、通性名詞、疑問詞をどのような代名詞で受けるべきかについては、これまでさまざまな議論がなされてきた。

Bodine (1975) によれば、通性代名詞としての he の使用の歴史は、実はそれほど長いものではなく、18 世紀の規範文法家が正用法として文法書に掲載したものであり、それ以前の英語では、he ではなく they を単数とみなして使用していた。このように、単数の環境で they を使用することは、単数の (singular) they と呼ばれている。

このほかに、通常ならば、通性代名詞を使用するところを、二重代名詞 (double pronoun) で表現することもある。everyone などを男性形だけで受けるのは問題があるため、最近では少々長たらしい表現である he or she, his or her, him or her という表現や、書きことばでは he or she をまとめて s/he などという表現まで使うことが多くなっている。このような表現を二重代名詞と呼ぶ。

(2) Everyone loves his or her mother. (OALD9)

Someone などの不定代名詞と he, she を各文で交互に使用する作家はいるが、he と she

の交互使用が長く続くと、読者には読みづらく感じることもあるので、それほど一般には受け入れられてはいない (Wales (1996: 122))。

he, she を段落ごとに使用する作家もいる (Larsen-Freeman and Celce-Murcia (2016: 313))。たとえば、Tannen (1986: 3-4) が挙げる例では、someone が 2 度現れる。そのうち第 1 段落の someone を she で受け、第 2 段落の someone は he で受けている。

この文章の第 1 段落の someone は好ましい人物として描かれているが、第 2 段落の someone はあまり好ましいとは言えない人物として描かれている。この場合、どちらの someone に he を使うか she を使うかは個人の好みの問題とも言えるが、この文章の著者であり、フェミニストの言語学者である Tannen (1986) は、第 1 段落の someone を she で、第 2 段落の someone を he で受けている。つまり、「人の好き嫌い」を代名詞の she と he の差異で表していると考えられる (本例文の存在は山本英一教授 (関西大学) のご指摘による)。

このような問題を一挙に解決しようと、英語の 3 人称単数の代名詞として、あらたな通性代名詞を提案した人々も少なからずいた。Baron (1981) は 1850 年から 1978 年までに提案された 35 種類以上の通性代名詞を挙げている。以下はその中で紹介されたものの一部である。

表 1. これまで提案された通性代名詞

主格	目的格	所有代名詞 (提案された年)
Hi	hem	hes (1884)
Thon	thon	thons (1884)
She	herm	heris (1970)
Ze	zim	zees (1972)

長年にわたり、これだけ多くの通性代名詞が提案されていることから、男女ともに用いられる単数扱いの通性代名詞が英語にいかにも必要とされているかを、私たちは理解することができる。ただし、これまでこれらの通性代名詞は、単なる好事家の提案としか見なされていなかったことも事実である。

ところが、LGBT が俄かに脚光を浴びだしたために、事情が少しずつ変わり始めた。従来これらの人々の存在が表に現れることは多くなかった。しかしながら、性的少数者の権利を尊重する、男女の性に限らない「ノンバイナリー」(non-binary) な選択ができる社会が近づいてきた。いわゆる inclusive (包括的で差別のない) な社会の到来である。

ここへ来て LGBT の人たちが、新たにどういう代名詞を使うかということが緊急の課題となっている。そこで、再注目されたのが、これまで一部の人にのみ話題となっていた「表 2」の新しい通性代名詞であった。なかでも注目を浴びたのは ze という代名詞である。ze はドイツ語の 3 人称の sie と同じ発音をもっていることから、新しい通性代名詞として使用され始めた。

米国の一部の大学では、キャンパスで学生を 3 人称で呼ぶ時どんな呼称で呼んで欲しいかを前もって聞いておくことが増えている。その調査の時に尋ねる言葉が **What's your pronoun?**

である。たとえば、テネシー大学が挙げているキャンパスで使用される 3 人称単数の代名詞は以下の 6 通りである (Baron (2020: 21))。

表 2. 大学のキャンパスで使われ始めた 3 人称単数の代名詞

	主格	目的格	所有代名詞	発音
gender	she	her	hers	as it looks
binary	he	him	his	as it looks
gender	they	them	theirs	as it looks
neutral	ze	hir	hirs	zhee, here, heres
	ze	zir	zirs	zhee, zhere, zheres
	xe	xem	xyrs	zhee, zhem, zehers

上記の表によると、性的に「バイナリー」な言い方が **she** と **he** の 2 つで、性的に「中立的」な言い方が **they**, **ze**, **ze**, **xe** の 4 つである。この中で、「単数の **they**」の用法は定着していると言ってよいわけだが、その他の 3 つの **ze**, **ze**, **xe** のような代名詞の用法は、まだ定着しておらず、一部の大学やコミュニティの中で使用されているだけであり、一般的な用法とは言い難い状況である。したがって、**ze** や **xe** は一般の辞書などには、まだ掲載されていない。

但し、ネット上の Cambridge English Dictionary には **ze** が一例あがっている。

(3) **ze**: a pronoun sometimes used instead of “he” or “she” because it does not show a particular gender: During the registration process at Harvard University, students are now allowed to indicate which pronouns they use, with suggested gender-neutral options like “ze” or “they”.

**Ze** は特定の性別を示さないため、「彼」または「彼女」の代わりに使用されることがある。ハーバード大学の登録手続きでは、学生はどの代名詞を使うかを指定することができ、「**ze**」や「**they**」といった性別にとらわれない選択肢が提案されている。なお、北米では、研究者の集まる学会やイベントなどで、あなたが呼ばれたい代名詞（たとえば、**he/him** など）をネームタグの所定欄に記入しておくようなことがしばしばある。

このように英語の通性代名詞は、急速に変化している。

## 参考文献

(辞典)

OALD8,9: Oxford Advanced Learner's Dictionary of Current English. 8th ed., 2010, 9th ed., 2015, Oxford University Press, Oxford.

WDEU: Merriam-Webster's Dictionary of English Usage, 1989 Webster, Springfield, Mass.

(著書・論文)

Baron, Dennis (1981) "The Epicene Pronoun: The Word That Failed," *American Speech* 56, 83-97.

Baron, Dennis (2020) *What's Your Pronoun?*, Liveright Pub., New York.

Bodine, Anne (1975) "Androcentrism in Prescriptive Grammar: Singular 'they,' Sex-Indefinite 'he,' and 'he or she,'" *Language in Society* 4, 129-146.

Bolinger, Dwight (1980) *Language: The Loaded Weapon*, Longman, London.

(小野塚裕視 (他) (訳) (1988) 『凶器としてのことば』 こびあん書房、東京)

神崎高明 (2022) 『英語のジェンダー』 開拓社、東京.

Larsen-Freeman, Diane and Marianne Celce-Murcia (2016) *The Grammar Book*, 3rd ed., National Geographic Learning, Boston.

Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech and Jan Svartvik (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*, Longman, London.

Tannen, Deborah (1986) *That's Not What I Meant*, Ballantine Books, New York.

Wales, Katie (1996) *Personal Pronouns in Present-Day English*, Cambridge University Press, Cambridge.